

## ペルシア語地理書Hudud al- 'Alamにおけるhududの 概念

清水, 宏祐  
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 教授 : イラン史

<https://doi.org/10.15017/1154>

---

出版情報 : 史淵. 140, pp.1-40, 2003-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# ペルシア語地理書 *Hudūd al-‘Ālam* における *ḥudūd* の概念

清水 宏 祐

## はじめに

イスラム世界では、9世紀の半ばからイブン・ホルダーズベ Ibn Khurdādhbih の『諸国と諸道の書』(*Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*) をはじめとして、地理書が書かれるようになり、10世紀には、その数はピークに達した。これらは、皆アラビア語で書かれたものであって、ペルシア語で書かれたものは、10世紀の末に現れた *Hudūd al-‘Ālam* 『世界諸境域誌』が最初である。

*Hudūd al-‘Ālam* は、アラビア文字でつづられた近世ペルシア語としては最初期の散文であり、ペルシア文学史の上でも重要な地位を占めている。

当時、いわゆる「ペルシア語文化圏」は、まだ未成立であり、文献が書かれ、また読まれた範囲は、ホラーサーン、マー・ワラー・アンナフルなどごく狭いものであった。したがって、イスラム世界全域で読まれたアラビア語地理書と比較すると、ペルシア語文献の流通範囲の狭さ故、かえって当該地域の固有情報を伝えていると判断される箇所がある。

中でも、イラン東部から中央アジアにかけての記述は特に貴重なもので、古くは V. V. Balthold、V. Minorsky、我が国では安部健夫らが、これに注目した。以来、中央ユーラシア史、イラン史研究者には、必読史料として重用されている。

この地理書では、全60章で二百数十回と、きわめて頻繁に *ḥudūd* という語が現れる。一例として、25章「マー・ワラー・アンナフルの地方とその諸都市についての記述」の冒頭部分をあげてみよう。

その東の ḥudūd は、トゥツバトの ḥudūd、南はホラーサーンとホラーサーンの ḥudūd、西はグーズと、カルルクの ḥudūd、北もまたカルルクの ḥudūd である地方である (nāhiyatīst ki ḥudūd-i mashriq-i way ḥudūd-i Tubbatāst wa junūb-i way Khurāsān ast wa ḥudūd-i Khurāsān wa maghrib-i way Ghūzast wa ḥudūd-i Khallkh wa shamālash ham ḥudūd-i Khallkh ast)  
p.105

マー・ワラー・アンナフル「地方」(本書では、一貫して、地方を表す語としては、nāhiyat が用いられている) の周辺の状況を説明するのに、ことごとく ḥudūd の語が使われていることが、見てとれよう。

ḥudūd は、「境界」を示すアラビア語 ḥadd の複数形である。本来なら、ある地方の東西南北すべての境界を総称するような、「諸境界」を意味する。アラビア語の地理書に使われる ḥudūd は、このような意味のものが多。これについては、後ほど触れることにしよう。

それに対して、*Ḥudūd al-‘Ālam* に見える ḥudūd は、あきらかに異なる用法である。上の記述に出てくる ḥudūd が、もし「マー・ワラー・アンナフル」の境界、それに接する他地方(集団)の境界を示すのであれば、ḥadd の語を用いるべきであろう。

それに対して *Ḥudūd al-‘Ālam* で使われる ḥudūd は、「境界」ḥadd の複数形「諸境界」というよりは、広がり、幅をもったさかいめ、あるいは、あいまいなグレーゾーンを表すものと考えられてきた。Minorsky は、*Ḥudūd al-‘Ālam* に、Regions of the World という表題をつけ、我が国では、それを受けたか、「境域」という訳語が与えられた。本稿でもそれにならって、ḥudūd に対してはひとまず「境域」の語をあてておく。これは、研究者が現代の分析用語としてもちいるものとは異なることをお断りしておきたい。

*Ḥudūd al-‘Ālam* の本文中では、ḥudūd が一見するとさまざまな状況で、異なる意味をこめて使われているようにも思われる。そこで、Minorsky は、これに Marches, districts, confines, limits, provinces, territory と多様な訳語をあてはめて、文章の整合性をもたせた。そのため、かえって用語の本来の意味が

不明瞭になってしまった感がある。

従来、この言葉 *ḥudūd* それ自体を分析した研究は見られず、Balthold が *limits* と呼んで、簡単にコメントしたものがあにすぎない。本稿では、*ḥudūd* が、どのような状況で、どのように用いられているかを検討し、本来は、ひとつの概念を表すものであったことを論証しようとするものである。

ここで、*Ḥudūd al-‘Ālam* についての書誌学的データを簡単に記しておく。

『世界諸境域誌』*Ḥudūd al-‘Ālam* の著者は不明で、著作年代が372A.H./982年。この年に、サーマーン朝下のグーズガーナーンの地方支配者、ファグフル家のアブー・アルハーリス・ムハンマドに献呈されたことが序章の中で述べられている。現存の孤写本は、656A.H./1258年に Abū al-Muayyid ‘Abd al-Quyūm (Quyyūm?) al-Husayn b. ‘Alī al-Fārsī によって書写されたものである（レニングラード写本・39葉、17×27cm）。1882年、ブハラにおいて、A.G. Thoumansky の依頼を受けた Abū al-Faḍl Gulpāygānī が、この写本を発見、Thoumansky は、これを *The Book of Frontiers (or Limits)* として報告した。この写本の現物をもとに、Minorsky が、翻訳とコメントリーをつけて、ロンドンより出版したのが、V. Minorsky, *ḤUDŪD al-‘ĀLAM ‘The Regions of the World’*, G.M.S., London, 1937. である。

本稿で使用する刊本は、Ed. Manūchehr Sotūde, *Ḥudūd al-‘Ālam min al-Mashriq ilā al-Maghrib*, Tehrān, 1340/1962. である。

## 第 I 章 ḥadd、sar ḥadd、ḥudūd

まず、*Ḥudūd al-‘Ālam* に現れる、*ḥadd* に関連する語について触れる。これには、主として、三つのものがある。すなわち、*ḥadd* (境界)、*sar ḥadd* (さらに狭い意味での境界)、*ḥudūd* (上述のように便宜上・「境域」で統一する) の三つである。

*ḥadd* は、文字通り二つのものの間の「境」として使われている。以下に用例

を示す。

23-20 (23章20節、以下同様) :

ヘラート : ……そこには大きな河がある。その河は、グールとグーズガーナーンの間の境界を流れている (Harī...ūrā rūd ast buzurg ki az ḥadd-i miyān-i Gūr wa Gūzgānān rawad) p.91

これは、二つの地方 (nāhiyat) を川が境界として区切っているという記述である。

32-25 : (ダイラマーンの地方と、その諸都市についての記述中のギーラーンについての部分)

ギーラーン : ダイラマーンとジバルとアゼルバイジャンとカスピ海 (ハザルの海) のあいだにある、別個の地方である……ギーラーンとダイラマーンの間すべての境界で、毎日、村毎に一回や二回は争いがある。どの村でも、ほかの村との間で、アサビーヤ (なわばり意識・仲間意識 : イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』のキーワードである 'aṣabiya 部族的党派心) のために人が殺される日がある。このアサビーヤは、そのものたちの間ではいつも続いていて、争いごとが絶えない… (bi-hama ḥadd-i Gilān u Daylamān har rūzī bi-har dahī yak bār yā dū bār ḥarb kunand.....) p.149

この部分の ḥadd は、○と○との間の境という用法である。次に sar ḥadd の用例を検討する。

sar ḥadd の例

23-6 : (ホラーサーンの章、ジャージャルムの町の節)

グルガン街道沿いにあり、グルガンの境界にあつて、物資の集まる小都市である。クーミス、ニーシャープールの物資の集まる所でもある (shahrakīst bar rāh-i Gurgān bar sar ḥadd u bārkada-yi Gurgān ast wa ān-i Kūmish u Nishābūr ast) p.89

ここでの sar ḥadd は、街道の線上にあつて、物資が集まる、具体的なポイントとしての境界を示している。

24-12：

ザミン・ダーワル：グールとブストの間の境界 (sar ḥadd) にある繁栄した地方である。ティク、ドゥルグシュ Tik、Durghush 二つの町があり、このどちらもグールに面した thaghr (“frontier forts”: Minorsky, p.111) である p.103

ここでも、sar ḥadd は、ḥadd よりも強く「境界」を限定する意味で、用いられている。

この項は、ペルシア語地理書に thaghr が用いられる例でもある。thaghr は、アラビア語の地理書、史料では、主としてイスラム世界と、非イスラム世界の間の境界領域を示す用語である。ここでも、その用法には変わりはない。

25-84：

イスビージャーブ：ムスリムたちと異教徒たちの間の境にある地方である (Isbījāb nāḥiyatist bar sar ḥadd miyān-i muslimānān u kāfirān)。広大で繁栄した場所で、トゥルキスターンの境界にある (jāyī buzurg ast wa ābādān bar sar ḥadd-i Turkistān)。トゥルキスターンじゅうで産出されるどんなものも、そこに集まる。そこには多くの町、地方、ルースター がある。そこからはフェルトと羊を産する。この地方のカサバがイスビージャーブと呼ばれる町なのである (har chizī ki rūstāhā az hama Turkistān khizad ānjā uftad wa andar-way shahrhā u nāḥiyathā u rūstāhā bisyār wa az way namad khizad wa gūspand wa qaṣaba-yi in nāḥiyat shahrist Isbījāb khwānand) p.117

イスラム世界と非イスラム世界との接点としての sar ḥadd が用いられている。thaghr の語は使われていないが、24-12と共通する状況である。やはり、sar ḥadd では、ḥadd よりも「境界」の意味が強調されている。

このように、sar ḥadd は、ḥadd よりも、限定の度合いが強い。街道上にあって、ピンポイントで二つのものを分けているところや、はっきりと二つの部分を分けていることが強調されている表現といえる。

## 第II章 hudūd の語の出現頻度

次に、hudūd の語の分析に入る前に、この地理書では、どのくらいの割合で hudūd が使われているかを、章別に見てみよう。序章から 8 章までの構成は、以下のとおりである。

### 序章

2 章：大地の成り立ち、人の住むところと不毛なところについての記述

3 章：海と湾の成り立ちについての記述

4 章：島についての記述

5 章：山と、その中にある鉱山についての記述

6 章：川についての記述

7 章：ステップ、沙漠 (biyābānhā u rīghā) についての記述

8 章：地方 (nāhiyathā) についての記述

これらは、自然条件にかかわるものなので、本稿では取りあげず、別の機会に論じることにする。確認するのは、具体的に「地方」について記述する 9 章-60 章についてである。以下、hudūd の語の出現頻度を、各章冒頭部の地方名につづいて、その「地方」を定義する「タイトル」部分、「地方」に含まれる都市や村についての特徴が列挙される、「本文」の部分とにわけて見ていく。

9 章：チーニスタンの地方の特質についての記述 (sukhan andar khāṣiyat-i nāhiyat-i Chīnistān)：タイトルのところで 2 回、本文 0 回

10 章：ヒンドゥースタンの地方とその諸都市についての記述

タイトル 0 回、本文中に 2 回

11 章：トゥッバトの地方とその諸都市についての記述

タイトル 2 回、本文 2 回

12 章：トゥグズグズの地方とその諸都市についての記述

タイトルで 1 回、本文 0 回

- 13章：ヤグマーの地方とその諸都市についての記述  
タイトル1回、本文0回
- 14章：ヒルヒーズの地方についての記述  
タイトル2回、本文0回
- 15章：カルルクの地方とその諸都市についての記述  
タイトル5回、本文2回
- 16章：チギルの地方についての記述  
タイトル2回、本文0回
- 17章：トゥフシュの地方とその諸都市についての記述  
タイトル1回、本文0回
- 18章：キマクの地方とその諸都市についての記述  
タイトル・本文（切れ目なし）0回
- 19章：グーズの地方についての記述  
タイトル・本文（切れ目なし）0回
- 20章：バジャーナーク・トゥルクの地方についての記述  
タイトル・本文（切れ目なし）3回
- 21章：ヒフチャーフ（キプチャク）の地方についての記述  
タイトル・本文（切れ目なし）0回
- 22章：マジュガリーの地方についての記述  
タイトル・本文（切れ目なし）0回
- 23章：ホラーサーンの地方とその諸都市についての記述  
タイトル2回、本文13回（うちグーズガーナーンについての部分で6回）
- 24章：ホラーサーンの境域地方とその諸都市についての記述  
タイトル2回（3回）、本文1回
- 25章：マー・ワラー・アンナフルの地方とその諸都市についての記述  
タイトル5回、本文3回うち1回は、「境界」の複数としての *hudūd* か？
- 26章：マー・ワラー・アンナフルの境域地方とその諸都市についての記述  
タイトル5回（6回）、本文7回



27章：シンドの地方とその諸都市についての記述

タイトル1回、本文2回

28章：キルマーンの地方とその諸都市についての記述

タイトル1回、本文0回

29章：パルス地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文5回

30章：フーズィスターンの地方とその諸都市についての記述

タイトル1回、本文0回

31章：ジバルの地方とその諸都市についての記述

タイトル4回、本文0回

32章：ダイラマーンの地方とその諸都市についての記述

タイトル1回、本文3回

33章：イラクの地方とその諸都市についての記述

タイトル4回、本文0回

34章：ジャズィーラの地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文0回

35章：アゼルバイジャンの地方と、アルメニア、アッラーンの地方とその諸都市についての記述：タイトル4回、本文0回

36章：アルメニアとアッラーン（35章から連続していて、タイトル部分がない）：本文0回

37章：アラブの地方とその諸都市についての記述

タイトルに続く説明部分1回、本文2回

38章：シリアの地方とその諸都市についての記述

タイトル4回、本文1回

39章：エジプトの地方とその諸都市についての記述

タイトル3回、本文0回

40章：マグリブの地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文2回

41章：アンダルス<sup>1</sup>の地方とその諸都市についての記述

タイトル1回、本文1回

42章：ルーム<sup>2</sup>の地方とその諸都市についての記述

タイトル3回、本文0回

43章：サクラーブ (Saqlāb) の地方についての記述

タイトル0回、本文0回

44章：ルース (Rūs) の地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文0回

45章：内ブルガール (Bulghār-i andarūnī) の地方についての記述

タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

46章：ミルワート (Mirwāt) の地方についての記述

タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

47章：ハザルのペチェネク (Bajanāk-i Khazar) の地方についての記述

タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

48章：アラーン Allān (al-lān) の地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文0回

49章：サリールの地方とその諸都市についての記述

タイトル2回、本文0回

50章：ハザルたち (Khazarān) の地方についての記述

タイトル0回、本文0回

51章：ブルタースの地方についての記述

タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

52章：バラードースの地方についての記述

タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

53章：ヴヌンドゥル (VNNDR) の地方についての記述

タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

54章：南の地方の人の住むところ (ābādānī-yi nāhiyathā-yi junūb) について

の記述：タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

55章：ザンジスタン (Zangistān) の地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文0回

56章：ザーバジュ (Zābaj) の地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文0回

57章：アビシニアの地方とその諸都市について

タイトル0回、本文0回

58章：ブジャ (Buja) の地方についての記述

タイトル・本文 (切れ目なし) 0回

59章：ヌビア (Nūba) の地方についての記述

タイトル0回、本文1回

60章：スーダンの地方とその諸都市についての記述

タイトル0回、本文1回

以上列挙した、章別の出現頻度を通観すると、hudūd の語が最も頻繁に現れるのは、ホラーサーンとマー・ワラー・アンナフルについての記述においてであることがわかる。中でも、本書が書かれた舞台となったグーズガーナーン (グーズガン、ジュースジャー) 地方で、際だって多く使われていることが目を惹く。つまり、本書の情報量が多いところほど、書き手と読み手とがよく知っている地方ほど、この hudūd の語が使われているわけである。

これを見ると、hudūd は、けして「あいまいな」概念ではなく、書き手と読み手のあいだで、よく了解された用法であることがわかる。

### 第III章 「ホラーサーン」と「ホラーサーンの境域」の章における用語の使用例

それでは、hudūd は、どのような状況で、なにを表すために使われているだろうか。まずは、この語が頻繁に現れる、ホラーサーン、マー・ワラー・アンナフルの部分を見てみることにしよう。

はじめはホラーサーン地方についてである。章のタイトルに続く冒頭部分は、

以下のものである。

### 23章 ホラーサーン地方 (nāhiyat-i Khurāsān) についての記述

その東はヒンドゥースターン、南はホラーサーンの境域のある部分とカルガスクーフの砂漠のある部分、西はグルガーンの諸地方、とグルル (グーズ) の境域、北はジャイフーン河 (アム河) である地方である (nāhiyat mashriq-i way Hindūstān ast wa junūb-i way ba'dī az ḥudūd-i Khurāsānast wa ba'dī biyābān-i Kargaskūh wa maghrib-i way nawāhī-yi Gurgānast wa ḥudūd-i Ghūr (Ghūz) wa shamāl-i way rūd-i Jayhūn ast) p.88

この記述によれば、「ホラーサーン地方」の東にさらに「ホラーサーンの境域」があることになる。これが24章で述べられる「ホラーサーンの境域地方」である。また、西に「グルルの境域」(方角から見てグーズの誤記であるが)を記すのが、注目される。

23-8 :

ジャルマガーン、スィービーナカーン、フージャーン、ラーヴィーニー (Jarmagān u Sībinakān Khūjān Rāwīnī: shahrakhāyī and bā kisht barz bisyār u ābādān wa andar miyān-i kūh wa dasht nihāda wa īn hama az ḥudūd-i Nishābūr ast) ……これらはみな、ニーシャープールの「境域」に属している (īn hama az ḥudūd-i Nishābūr ast) p.90

ここでいう「境域」ḥudūd は、複数の小都市を含む、大都市の「都市圏」に相当する広がり表現したものである。上記の4小都市が、ニーシャープールの「都市圏」に含まれていることを示すための記述であろう。

23-12 :

マイハナ：バーワルドの境域に属し (az ḥudūd-i Bāward wa andar miyān-i biyabān nihāda)、ステップ (biyabān) の中にある小都市である。p.90

この記述も同様で、バーワルドの「都市圏」に含まれるさらに小さな町を取り扱っている。

23-13 :

トゥルシーズ、クンドウル、バナーバド、トゥーン、クリー：クーヒスター

ンとニーシャープールの境域に属し、耕地の多い小都市である (Turshīz u Kundur Banābad Tūn Kurī: shahrakhāyī and az ḥudūd-i Kūhistān wa Nishābūr bā kisht u barz bisyār) (クーヒスターンの境域とニーシャープールの境域) p.90

ここで列挙されている諸都市は、クーヒスターンの ḥudūd「境域」中にあり、さらに都市ニーシャープールの「境域」に属していることになる。つまり、「都市圏」としての「ニーシャープールの境域」が、クーヒスターン地方にまで入り込んでいて、両方の「範囲」が、一部で重複していることになる。

23-19 :

プージャカーン、ハーイマンド、サンガーン、サルミド、ズザン：ニーシャープールの境域に属し、多くの耕地を備えた土地であり、綿織物 (karbās) を産する (Pūzhakān Khāymand Sangān Salūmid Zūzan: shahrakhāyī and az ḥudūd-i Nishābūr wa jāyhā-yi bisyār bā kisht u barz and az in shahrkhā karbās Khīzad) p.91

上に挙げられている小都市も、「都市圏」としてのニーシャープールの「境域」に含まれているものである。これらの記述から、「都市の ḥudūd」とは、「都市圏」いいかえれば都市の影響の及ぶ範囲を示すものであることが、重ねて推察される。

23-46 :

グーズガーナーン Gūzgānān : これは次のような地方である。すなわち、その東はバルフの境域とトハーリスターンで、パーミヤーンの境域に至る (in nāhiyatī ast ki mashriq-i ū ḥudūd-i Balkh ast wa Tukhāristān tā bi-ḥudūd-i Bāmiyān)。南はグールの境域の端とブストの境界 (junūb-i way ākhar-i ḥudūd-i Gūr ast ḥadd-i Bust)、西はガルチスターンの境域とバシーンのカサバであり、マルヴの境域に至る (maghrib-i way ḥudūd-i Gharchistān ast wa qaṣaba-yi Bashīn ast ta ḥudūd-i Marw)。そして、北はアム河の境域である (shamāl-i way ḥudūd-i Jayhūn ast) p.95

*Ḥudūd al-'Ālam* が書かれた舞台であるグーズガーナーンについては、そこ

を中心とする各方面について、「境域」と「境界」とが併記され、使い分けられている。ガルチスターンの「境域」は、「マルヴの境域に至る」として、端が明確に規定されている。これに続く部分は、以下のようである。

この地方の統治者は辺境の諸王の一人である。ホラーサーンでは、彼をグーズガーナーンの王と呼んでいる。彼はファリードゥーンの一族の出である。ガルチスターンの境域とグールの境域のすべてのムフタルは、彼の支配の下にある (pādshā-yi in nāḥiyat az mulūk-i aṭrāf ast wa andar Khurāsān ūrā Malik-i Gūzgānān khwānand wa az awlād-i Farīdūn ast wa har muhtarī ki andar ḥudūd-i Garchistān ast wa ḥudūd-i Gūr ast hama andar farmān-i ū and) p.95

この記述では、「グーズガーナーンの王」の支配の及ぶ範囲として「境域」が示されている点が、大いに注目される。以下、23章の中で ḥudūd の語が使われているところを列挙していく。

23-49：

タマラーン、タマーザーン：山中のカルワーンの宿の境域に近い二つの地方である (Tamarān Tamāzān: dū nāḥiyat ast bi-ḥudūd-i ribāṭ-i Karwān nazdik andar kūhhā) p.96

ここでの「境域」は、宿駅へのある距離圏（に近い）を意味している。カルワーンの宿とは、次の項で述べられている。

23-63：

カルワーンの宿：グーズガーナーンの sar ḥadd (境界) にある町であり、山中には金（鉞）がある (shahrakīst bar sar ḥadd-i Gūzgānān wa andar kūhhā-yi way ma'dan-i zarast) p.98

このように、境界上にある場合には、ḥudūd ではなく、sar ḥadd が用いられる。違いの再確認のため、ここにあげておく。

23-65：

アジーウ：グーズガーナーンの徴税区の端にある小都市である (shahrakīst bi-ākhar-i 'amal-i Gūzgānān)。数え上げたこれらすべての都市は、グーズ

ガーナーンの王の統治下にある (wa in hama shahrhārā ki yād kardīm az ān-i padshāhī-i malik-i Gūzgānān ast)。この町の諸ステップには、およそ 2 万人のアラブがいる。羊とらくだを多数所有している人々で、かれらのアミールは、グーズガーナーンの王の許より来る。そして、年に 2 回サダカをかれに支払う (andar biyabān-i shahr miqdār-i bist hazār mardast ‘Arab mardmānī and bā gūspandān u shutrān-i bisyār wa amīrashān az ḥadrat-i malik-i Gūzgānān rawad wa dū ṣadaqāt bi-dū dahand) p.98

ここでは ḥudūd は用いられていないが、「グーズガーナーンの王」の「統治」の実態を示すものとして、とりあげておく。‘amal の端にある小都市、さらにはその周辺にあって、都市の影響が及ぶ範囲にいる遊牧民から、徴税が行われる。それを、「統治下」にある、と記すわけである。

23-78 :

バーミヤーン：グーズガーナーンとホラーサーンの境域との境界にあり、多くの耕地がある。その支配者はシール（獅子）と呼ばれている。大きな川がそのへりにそって流れている。そこには二つの大きな石の仏像がある。一つは赤い仏像、もう一つは白い仏像と呼ばれている (Bāmiyān: shahrīst bar ḥadd miyān-i Gūzgānān u ḥudūd-i Khurāsān wa bisyār kisht u barz ast wa pādshā-yi ūrā shīr khwānand wa rūdī buzurg bar kirān-i ū hamī guzarad wa andar way dū but-i sangīn ast yakī-ra surkh but khwānand wa yakī-ra khing but) p.101

「グーズガーナーン」と「ホラーサーンの境域」との境界（の上にある）ということ、ḥadd と ḥudūd が明確に区別されていることを物語っている。「境域」ḥudūd は、「境界」ḥadd の単なる複数形「諸境界」ではなく、別の概念を表すことがわかる。それは、グーズガーナーンという地方に匹敵する「広がりをもつ範囲」といえよう。それが、24章で「ホラーサーンの境域地方」とされる広がりである。

24章 ホラーサーンの境域地方 (nāḥiyat-i ḥudūd-i Khurāsān wa shahrhā-yi way) とその諸都市についての記述

その東はヒンドゥースターン、南はシンドとキルマーンの砂漠、西はヘラー  
トの境域 (Hudūd-i Harī) 北はガルチスターン、グーズガーナーン、トハー  
リスターンの境域である地方である (nāhiyatīst ki mashriq-i way Hindūs-  
tān ast wa junūb-i way biyabān-i Sindast wa biyabān-i Kirmān wa  
maghrib-i way hudūd-i Harīst wa shamāl-i way hudūd-i Gharchistān ast  
wa Gūzgānān u Tukhāristān wa īn nāhiyatīst ki ba'dī azū garmsīrast wa  
ba'dī sardsīr) p.101

繰り返しになるが、ここでは「境域」hudūd は、ホラーサーンの南にあって、  
上で規定されているような、明確な範囲の地方を示しているわけである。「ホ  
ラーサーン」と「ホラーサーンの境域」とが、どのような関係にあるかを確認  
するため、23章と24章に含まれる都市、地方を一覧で示してみよう。以下のと  
おりである。

### 23章 ホラーサーン地方とその諸都市に含まれるもの一覧

1. Nishābūr
2. Sabzawār (bar rāh-i Rayy)
3. Khusrawjird (nazdīk-i ū Sabzawār)
4. Bahmanābād Mzinān (bar rāh-i Rayy)
5. Āzādhwār (andar miynā-i biyābān...bar rāh-i Gurgān)
6. Jājarm (bar rāh-i Gurgān bar sar ḥadd u bārkada-yi Gurgān ast wa ān-i  
Kūmish u Nishābūrast)
7. Sibarāyin
8. Jarmagān Sībīnakān Khūjān Rāwīnī (wa īn hama az hudūd-i Nishābūr-  
ast)
9. Nasā
10. Bāward
11. Tūs
12. Mayhana (shahrakīst az hudūd-i Bāward wa andar miyān-i biyābān



- nihāda)
13. Turshīz Kundur Banābad Tūn Kurī (shahrakhāyī and az ḥudūd-i Kūhistānast wa Nishābūr)
  14. Qā'in (qaṣaba-yi Kūhistānast)
  15. Ṭabasayn
  16. Kurī
  17. Ṭabas-i Masīnān
  18. Khuwar Khusb
  19. Pūzhakān Khāymand Sangān Salūmid Zūzan (shahrakhāyī and az ḥudūd-i Nishābūr....)
  20. Harī (Herāt)
  21. Būshang
  22. Nūzjagān
  23. Fargird
  24. Bādghīs
  25. Kātūn
  26. Khujistān
  27. Kūh-i Sīm
  28. Mālin
  29. Asbuzār
  30. Sarakhs
  31. Bawn
  32. Kīf
  33. Baghshūr
  34. Karūkh
  35. Shūrmīn (shahrakīst az 'amal-i Harī) ヘラートの徴税区に属する
  36. Gharchistān その中心地はバシーンである (qaṣaba-yi ū Bashīnast)
  37. Diza

38. Marūd (Marw al-Rūd)
39. Dar-i Hinf (Diz-i Aḥnaf)
40. Barakdiz
41. Kīrank
42. Marw
43. Shink-i ‘Abbādī
44. Dandānqān
45. Kushmīhan Musfarī Māshān Sūsanqān Shābirinjī Zarq (hama az ‘amal-  
i Marw ast)
46. Gūzgānān
47. Ribūshārān (az Garchistān-i Gūzgānān)
48. Dar-i Mishān (az dū nāḥiyatīst yakī az Bust wa dīgar az Gūzgānān)  
二つの地方にわかれて属する二つの小地方からなる
49. Tamarān Tamāzān
50. Sārwān
51. Mānshān (aknūn kardar az ḥaḍrat-i Malik-i Gūzgānān rawad)
52. Ṭāliqān (bar sar ḥadd-i Gūzgānānast wa az ān-i īn padshāyīst)
53. Jahūdān (mustaqarr-i Malik-i Gūzgānānast)
54. Bāryāb (Pāryāb)
55. Naryān (shahrakīst andar miyān-i Jahudān u Paryāb wa ḥadd-i ū dū  
farsangast) ?
56. Gurziwān (andar qadīm jāy mulūk-i Gūzgānān ānjā būdī)
57. K.N.D.R.M
58. Anbīr (qaṣaba-yi Gūzgānān)
59. Kalār
60. Ushbūrqān
61. Antkhudh
62. Sān

63. Ribāṭ-i Karwān (shahrīst bar sar ḥadd-i Gūzgānān)
64. S.N.K.B.N
65. Azīw (shahrakīst bi-ākhar-i ‘amal-i Gūzgānān)
66. Ḥawsh (az ān-i īn padshāh ast)
67. Balkh
68. Khulm
69. Tukhāristān
70. Simingān
71. Sakalkand
72. Baghlān
73. Walwālij (qaṣaba-yi Tukhāristān)
74. Sikīmisht
75. Sikīmisht の背後の支配者 (az pas īn Sikīmisht pādshā’īst khurd)
76. Ṭāyqān (shahrīst bar ḥadd miyān-i Tukhāristān u Khuttalān jāyīst bar dāman-i kūh nihāda)
77. Andarāb
78. Bāmiyān
79. Panjhīr Jāriyāna
80. Madr Mūtī (az ḥudūd-i Andarāb)

24章 ホラーサーンの境域地方とその諸都市についての記述

1. Ghūr
2. Sistān
3. Ṭāq
4. Kash (Gash)
5. Nih
6. Farah
7. Qarnī

8. Khwāsh
9. Bust (dar-i Hindūstānast wa jāy bāzargānānast)
10. Hālkān (Chālkān)
11. Sarwān
12. Zamīndāwar (前出)
13. Baghnī (bi-nazdik-i Ghūr)
14. Bishlang (az Ghūrast)
15. Khwānīn (az Ghūrast)
16. Rukhudh
17. Kuhak Rūdhān
18. Bālis
19. Ghaznī (Ghaznīn) ヒンドゥースターンにある。古くよりヒンドゥースターンに属していたが、今ではイスラーム (世界) の中にあり、ムスリムたちと異教徒たちの境界であり、商人たちの (集まる) 場所であり、多くの富がある。(andar Hindūstān ast wa az qadīm az Hindūstān būda ast wa aknūn andar Islāmast wa sar ḥaddīst miyān-i muslimānān u kāfirān wa jā-yi bāzargānān wa bā khwāsta-yi bisyār)
20. Kābul
21. Istākh
22. Ghazīn 境域の「カルルク系トルコ人」(Turkān-i Khallkh)
23. Barwān
24. Badhakhshān
25. Dar-i Tāziyān
26. Dih-i Sankas
27. Saqliya?

大別すれば、23章「ホラーサーン地方」の1-11節がニーシャープール (都市圏を含む)、13-19がクーヒスターン、20-34がヘラート (同じく都市圏を含む)、37-45がマルヴ (同)、46から66がグーズガーナーン、67-68がバルフ、69-80が

トハーリスターンに関するものである。

24章「ホラーサーンの境域地方」では、1節がグール、2-18がシースターン、19-23がガズニーン(ガズナ)、24-27がバダフシャーンに関連するものであって、「ホラーサーン地方」の東方、南方の地域が、これに相当することがわかる。これが「境域」の具体的な内容である。つまり、ホラーサーンの「さかいめ」ではなく、多くの都市を含んだ4つの「地方」が「境域」として認識されているのである。

さらに、この地方の中では、より小さな広がりを示す「境域」*ḥudūd*の語が、二重に使われている。それらの箇所を、以下に抜き出してみる。

24-22：

すでに述べた(記憶した)ガズナとこれらの小都市の境域内(つまり24-19から21までにあげられた都市、小都市)には、カルルクのトルコ人がいる。このカルルクのトルコ人は、バルフ、トハーリスターン、ブスト、グーズガーナンの境域に多くいる (*andar Ghaznīn u ḥudūd-i īn shahrak hā ki yād kardīm jāy Turkān-i Khallkh wa īn Turkān-i Khallkh nīz andar ḥudūd-i Balkh u Tukhāristān u Bust u Gūzgānān bisyārand*) p.104

この箇所では、「都市」の内部、「小都市の境域」に「カルルク系トルコ人」がおり、彼らは、バルフ、トハーリスターン等の「地方」の「境域」にも存在するとしている。ある人々がいる範囲を、「小都市の境域」、地方の「境域」と呼んでいるわけである。次にマー・ワラー・アンナフルについての章の本文部分(タイトル部分は2ページ目に示した)を見てみよう。

25-1：

ブハーラー：「ブハーラーの境域」、は12ファルサングかける12ファルサングである。(*Bukhārā: ...ḥudūd-i Bukhārā dawāzda farsang andar dawāzda farsangast*) p.106

都市ブハーラーの「境域」が、ここでは長さ、幅がそれぞれ12ファルサング(約72キロメートル)と、具体的な広がりをもったものとして語られる。これがブハーラーの「都市圏」の広がりと考えられていたわけである。

25-2 :

マアカーン、フジャーダク、ダンドゥーナ(ザンダナ)、ブームカス、マドヤー  
ミジュカス、ジャズガンカス(ハルガンカス)、ブハーラーの境域にあるミン  
バルを備えた小都市である (Ma'kān Khujādak Dandūna Būmkath  
Madyāmijkath Jazghankath shahrakhāyī and bā-minbar az ḥudūd-i Buk-  
hārā) p.106

5つの小都市を「ブハーラーの境域に属する小都市である」とするところに、  
「都市圏」としての「境域」観念が見て取れる。ミンバル(会衆モスクの説教  
壇)について言及しているのは、これらの小都市でもフトバが唱えられ、支配  
者名が公示されること、すなわち領域支配の拠点となること、人が集まる中心  
地であることを示している。

25-42 :

ブッタマーン：山と荒蕪地の中で、スルーシャナの境域にある (Buttamān:  
nāḥiyatīst andar kūhhā u shikastagīhā az ḥudūd-i Surūshana)。それには、  
三つの境界がある。内ブッタマーン、中ブッタマーン、外ブッタマーンであ  
る (wa ūrā sī ḥadd ast Buttamān-i andarūnī u Buttamān-i miyāna u  
Buttamān-i bīrūnī) p.111

「境域」と「境界」の語が同時に使用され、区別されている例である。ブッタ  
ム山地を三つに分け、それがスルーシャナ(ウスルーシャナ)の地方に「含ま  
れている」ことを示している。

25-63 :

イーラーク：地方である…その境域はフェルガーナ、ジャドガル、シャー  
シュ、ハシャルト川に接している (Īlāq: nāḥiyatīst ... wa ḥudūdash bi-  
Farghāna u Jadghar u Chāch u rūd-i Khashart paywasta ast) p.114

この場合の ḥudūd は、境域ではなく、境界 ḥadd の複数としての「諸境界」  
である。すなわち、東西南北など、各方向に境界がある時、それらを指して、  
「諸境界」ḥudūd といっているわけである。本書では、むしろ珍しい用法である  
が、このような、「諸境界」としての ḥudūd は、アラビア語の地理書にはよくみ

られるところである。

たとえば、イスタフリー-Istakhri の『諸国と諸道の書』(*Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*) では、地方の「境界」という意味で、通常は、単数の ḥadd の語が用いられている。東の ḥadd は○○、南の ḥadd は××という具合である。それに対して、ḥudūd は、上記の例文中の用法同様、東西南北それぞれの「境界」の総称として、つまり「諸境界」として使われることがほとんどである。ḥudūd それ自身が「地方」「広がり」を示すことは多くはない。つまりイスタフリーに現れる ḥudūd は、ḥadd の複数形としての、本来の用法である。

この点では、ḥudūd が特殊な意味で使われている *Ḥudūd al-‘Ālam* とは、はっきりとした対照をなしている。つまり、ペルシア語の *Ḥudūd al-‘Ālam* では、ḥudūd は、ḥadd とは異なる意味内容で使われているのに対して、アラビア語の地理書では、ḥadd と ḥudūd は、本来は同様の意味で、ただ単数が複数かの違いだけである場合が多いのである。

現代の刊本でのイスタフリー『諸国と諸道の書』の章別索引を見ると、それぞれの地方についての章の冒頭部に○○○の ḥudūd という部分が書かれている。これだけ見ると、イスタフリーでも *Ḥudūd al-‘Ālam* 同様、それぞれの地方定義に ḥudūd の語が頻出するかと誤解する恐れがある。しかし、その地方を記述する本文中には ḥudūd の語はほとんど見られず、○○○地方の東は○○○地方の境界と、ḥadd の語が列挙されている。また、本文中に ḥudūd とある場合は、まさに「諸境界」の意味で用いられている。このことから、現代の校訂者の ḥadd と ḥudūd のちがいについての、こだわりのなさがわかる。これは、史料そのもののもつ性格に由来するものといえよう。

たとえば、アラビア半島(Diyār al-‘Arab: Istakhri, p.19)、ペルシア湾(Bakhr Fārs: p.29)、マグリブ地方(Diyār al-Maghrib: p.33)、ジャズィーラの地(Ard al-Jazīra: p.52) などでは、隣接する他地方の境界は ḥadd で示されていて、ḥudūd を用いることはない。ホラーサーンの記述の章では、「○○○の地方が取り囲む」とあって、ḥadd の語すら用いられてはいない。

この点で、*Ḥudūd al-‘Ālam* とイスタフリーとは、文体、使用する用語の

点で大きな違いがあることがわかる。

## 第IV章

「ホラーサーン」とならんで、*Hudūd al-‘Ālam* では、「マー・ワラー・アンナフル」についても「境域」が別章として立てられている。

26章 「マー・ワラー・アンナフルの境域地方とその諸都市についての記述」冒頭部には、

マー・ワラー・アンナフルの境域は、一部がマー・ワラー・アンナフルの東に、一部がその西に散在している諸地方である (ḥudūd-i Mā warā’ al-nahr nāhiyatist parākanda ba’dī bar mashriq-i Mā warā’ al-nahr ast wa ba’dī bar maghrib-i ū ast)。マー・ワラー・アンナフルの(境域の)東は、トゥツバトとヒンドゥースターンの境域で、南はホラーサーンの境域、西はチャガーニヤーンの境域で、北はマー・ワラー・アンナフルのスルーシャナの境域である (ammā ānki andar mashriq-i Mā warā’ al-nahrast mashriq-i way ḥudūd-i Tubbat u Hindūstān wa junūb-i way ḥudūd-i Khurāsān ast wa maghrib-i way ḥudūd-i Chaghāniyān ast shamāl-i way ḥudūd-i Surūshanast az Mā warā’ al-nahr) p.118

とあって、「境域」が東と西に「地方」としてわかれて「散在」している様子を伝えている。この場合の「マー・ワラー・アンナフルの境域」が、どこを示しているかについて、内容を確認してみよう。

26章「マー・ワラー・アンナフルの境域地方とその諸都市の記述」でとりあげられている都市、地方は、以下のとおりである。

1. Khuttalān
2. Hulmuk (Khuttalān の qaṣaba)
3. Nuchārā (Khuttalān の bārgāh)
4. Bārghar
5. Bārsārāgh Munk Timliyāt?



6. Wakhsh
7. Halāward (qaṣaba-yi Wakhsh)
8. Līwkand (az Wakhsh)
9. Zhāsht (Būttamān と Khuttalān の間)
10. Kumijiyān: Khuttalān Chaghāniyān の境域の中
11. Khuttalān/Chaghāniyān の間の山中にいる集団 (Turkān-i Kanjīna)
12. Dar-i Tubbat (村である。そこには、山沿いに扉がある。そこには街道を監視し、通行税を徴収するムスリムたちがいる。この扉から出ると、ワッハーンの境域内にいることになる)(dihīst bar kūh nihāda wa ānjā muslimānānand ki bāzh sitādand wa rāh nigāh dārand wa chūn az īn dar birūn shawad bi-ḥudūd-i Wakhkhān uftad)
13. Rakhtajib
14. Sikāshim (shahrīst wa qaṣaba-i nāhiyat-i ū Wakhkhān ast)
15. Khamdhādh (jāīst ki andar but khānahā-yi Wakhīyānast)
16. Sanglanj
17. Rūstā-yi Malham
18. Samarqandāq (Wakhkhān)
19. Bulūr
20. Andrās (カシミールまで二日行程)
21. Khwārazm
22. Kāzh (Kāth) ホラズムの中心地でグーズのトルコ人への門口である。トゥルキスタン、マー・ワラー・アンナフル、ハザル人たちの荷物の集まる場所であり、商人たちの場所でもある。その支配者は辺境の諸王の一人で、ホラズムシャーと呼ばれる (qaṣaba-yi Khwārazm dar-i Turkistān-i Ghūzast wa bārgāh-i Turkān u Turkistān u Mā warā' al-nahr u Khazarānast wa jā-yi bāzargānānast wa Pādshā-yi way az mulūk-i atrāf wa ūrā Khwārazmshāh khwānand)
23. Khushmīthan 以前はホラズムシャーの支配するところであったが、今は

支配者は別であり。グールガーンジュのアミールと呼ばれている

24. Nūzhābān

25. Gurgānj

26. Kurdanāzkhās

27. Kurdar

28. Khīwa (az Gurgānj)

29. Jand Khwāra Dih-i Naw (Ghūz の王の冬営地 : wa malik-i Ghūzān bi-zamistān bidīn dih-i naw bāshad)

1 節から 5 節までがフッタル(フッタラン)、6-9 が、ワフシュ、12-20 がワッハーンと、マー・ワラー・アンナフルの東方地域、21-29 がホラズム (ハーラズム) で、西側の地域にあたる。これらは、西と東とにわかれてはいるが、それぞれマー・ワラー・アンナフルの「境域」として意識されていたことになる。つまり、東と西にある具体的な広がりをもつ「地方」が、一括して「境域」として記されているわけである。

ここまで ḥudūd の用例を見てくると、おのずと一つの推論が可能となる。

すなわち、「境域」 ḥudūd とは、

1. 筆者がもっとも詳しく知り、また献呈されたグーズガーナンの支配者にも了解される既知の世界について、もっともよく使われる語で、
2. 「ある影響、勢力、支配がおよぶ範囲」を意味し、
3. 「接する」という記述からもわかるように、その周縁部は、漠然としているものではなく、明確に「ここまで」と規定される範囲をもつものである、ということになる。
4. としては、ḥadd の複数としての「諸境界」という用例は、ほとんどないことも、特筆されよう。

以上述べた点をさらに確認するため、本書の他の地方の記述に現れる ḥudūd の用例を、以下で検討していくことにしよう。

## 第V章 ホラーサーン、マー・ワラー・アンナフル以外の章における

### 「境域」 ḥudūd

まずは、チーニスターンの章からである。

9章 チーニスターンの地方の特質についての記述 (sukhan andar khāshiyat-i nāhiyat-i Chinistān)

南はワークワークの境域、北はトゥツバトとトゥグズグズとヒルヒーズの境域 (junūb-i way ḥudūd-i Wāqwāq... shamāl-i way ḥudūd-i Tubbat u Tughuzghuz u Khirkhīz) p.59

他の章の冒頭部と同じように、方位ごとに他地方、「民族集団」の「勢力の及ぶ範囲」が述べられている。

10章 ヒンドゥースターンの地方とその諸都市についての記述

10-40:

バリーフーン：町である…キンナウジュに近い。(その)ラージャの境域である (Barīhūn shahrīst az ānjā Qinnawj nazdik ast wa ḥudūd-i rāyst) p.70

ここでは、文字通り「支配が及ぶ範囲」「支配領域」としての ḥudūd「境域」が用いられている。

12章 トゥグズグズの地方とその諸都市についての記述

安部健夫によって、英語訳から引用されている箇所である。比較のため、対応部分をペルシア語から全訳する。

その東はチーンの地方、南はトゥツバトの一部とカルルクの一部、西はヒルヒーズの一部である (mashriq-i ū nāhiyat-i Chinast wa junūb-i way ba'dī Tubbat ast wa ba'dī Khalkh wa maghrib-i way ba'dī Khirkhīzast)。北はみなヒルヒーズである。その境域の中すべてに (わたって) それは展開している (shamāl-i way har Khirkhīz ast andar hama-yi ḥudūd-i ū bi-rawad)。この地方は、トゥルクの中では大きな方の地方で、本来もっとも人数の多い部族であった。かつてトゥルクスターンのすべての王たちは、トゥグズグズの出身であった (in nāhiyat mihtar nāhiyat az Turk wa bishtarīn qawmī

būdand dar ašl u mulūk hama Turkistān andar qadīm az Tughuzghuz  
būdandī) p.76

「境域」の語は、一部にしか使用していないが、重要な記述を含んでいる。ヒルヒーズがトゥグズグズの北方全域にいるばかりでなく、「その境域」ḥudūdの中に(ずっと)延びているとして、「ḥudūdの内側」を強調している。ここでも、ḥudūdは、「含まれるか否かが問題」となる「範囲」なのである。ここでの「その境域」は、「トゥグズグズの境域」とも解釈できるが、この場合であれば、両者の「範囲」は集合A、Bの重なり合う共通の部分となる。つまり、両者は一部で入り組んだ状態でいたことになる。

### 13章 ヤグマーの地方とその諸都市についての記述

その西はカルルクの境域である (maghrib-i way ḥudūd-i Khallkh ast) p.78

### 14章 ヒルヒーズの地方についての記述

その東と南はトゥグズグズの境域とカルルクの一部である。その西は、キマクの境域の(一部)である (junūb-i way ḥudūd-i Tughuzghuz ast wa ba'dī az Khallkh wa maghrib-i way az ḥudūd-i Kimakast) p.79

ここでも ḥudūdは、人間集団に対して用いられ、あるものたちの「移動、居住、勢力」の範囲を示しているということになる。

### 15章 カルルクの地方とその諸都市についての記述

その東はトゥツバトの境域の一部とヤグマーの境域、トゥグズグズの境域であり、南はヤグマーの境域の一部とマー・ワラー・アンナフルの地方、西はグーズの境域、北はトゥフス、チギル、トゥグズグズの境域である (mashriq-i way ba'dī az ḥudūd-i Tubbat ast wa ḥudūd-i Yaghmā u ḥudūd-i Tughuzghuz wa junūb-i way ba'dī az ḥudūd-i Yaghmā u nāhiyat-i Mā warā' al-nahr ast wa maghrib-i way ḥudūd-i Ghūz wa shamāl-i way ḥudūd-i Tukhs u Chigil u Tughuzghuz) p.81

この章冒頭では、「境域」の語が多用されている。地方としてのマー・ワラー・アンナフル以外の人間集団には、皆 ḥudūdの語がつけられている。

15-12 :

ジャームガル：ステップの際でカルルクの境域に属する小さな町である  
(Jāmghar: shahrakīst khurd az ḥudūd-i Khallkh bar kirān-i biyabān)

p.83

ここでも、ḥudūd は、この町がカルルクの勢力、影響力の及ぶ範囲の中にあることを示している。

#### 16章 チギルの地方についての記述

それは本来はカルルクに属していた(の一部であった)。しかし、多くの人々がいる地方で、その東と南はカルルクの境域で、西はトゥフスの境域、北はヒルヒーズの地方である (Chigil: nāḥiyatīst wa aṣl-i ū az Khallkh ast wa lākin nāḥiyatīst bisyār mardum wa mashriq-i ū u junūb-i ū ḥudūd-i Khallkh ast wa maghrib-i way ḥudūd-i Tukhsast wa shamāl-i way nāḥiyat-i Khirkhīzast) p.83

この箇所では、「境域」ḥudūd と地方 nāḥiyat の語が混用されている。

#### 17章 トゥフシュの地方とその諸都市についての記述

その東はチギルの境域である。南はカルルクであり、カルルクの山地である。西はヒルヒーズの一群が占めており、北はチギルである (mashriq-i way ḥudūd-i Chigil ast wa junūb-i way Khallkh ast wa kūhistānhā-yi Khallkh wa maghrib-i way gūrūhī az Khirkhīz yānand wa shamāl-i way Chigil ast)

p.84

チギルの「境域」とは、その「勢力圏」を示し、ヒルヒーズの「一群」gurūhī が占めているというのは、文字通り、そこを占拠している集団の存在を示すものである。

#### 20章 バジャーナーク・トゥルクの地方についての記述

その東はグーズの境域、南はブルタースとバラードースの境域である。西はマジュガリーとルースの境域である。北はルーサー(河)である。(mashriq-i ū ḥudūd-i Ghūzast wa junūbash ḥudūd-i Burtās u Barādās ast wa maghribash ḥudūd-i Majgharī u Rūs ast shamālash Rūthā ast) 彼らには、ひと

つも都市がない。彼らの長もまた、彼らのうちから出たものである (Īshānrā hīch shahr nīst wa muhtarashān ham az īshānast) p.87

都市をもたないものについての広がり。そのその四方は、河を除けば、「境域」で限定されている。

26-1 :

フッタラーン…そのトゥツバト側の境域の中には、ステップに(住む)「野生の人々」がいる (andar ḥudūd-i way az sū-yi Tubbat mardmānī and wahshī andar biyābānhā) p.119

「トゥツバト側の「境域」の中」とあって、ḥudūdが一定の範囲を示すことが再確認される。ここでも、あくまでもḥudūdは、「その内側にあるか否か」が問題になる「範囲」となっている。

26-10 :

クミージャーンと呼ばれる人々の一団がフッタラーンとチャガーニヤーンの境域の中に定着している (gurūhī mardmān and ki īshānrā Kumījiyān khwānand wa andar ḥudūd-i Khuttalān u Chaghāniyān nishasta and) p.120

ここでも、「境域」の中とあって、人間集団の居住地を限定している。この場合は、フッタラーン(フツタル)とチャガーニヤーンの双方の範囲内の「広がり」「範囲の重なり合うところ」ということであろうか。

26-14 :

シカーシム…その境域から鞍布とワヒー矢を産する (Sikāshim....az ḥudūd-i way rū-yi namadzīn u tīr-i wakhī khīzad) p.121

「境域」からという場合には、その周辺の交易圏、あるいはそこを中心とする村々の「広がり」から、という意味であろう。

26-18 :

サマルカンダーク…マー・ワラー・アンナフルの境域の一番端である (Samarqandāq ... wa ākhar-i ḥudūd-i Mā warā' al-nahr) p.121

「マー・ワラー・アンナフルの境域」が、「端」をもつということで、「境域」

ḥudūd が、具体的な広がり の 範囲 を も つ も の で あ る こ と が、再度確認される。

26-21 :

ホラズム：ホラズムというのは、マー・ワラー・アンナフルの西に（接する：bar）のがホラズムの境域である（wa ammā Khwārazm ānki bar maghrib-i Mā warā' al-nahrast ḥudūd-i Khwārazm ast） p.122

前述のように、東と西にわかれている「マー・ワラー・アンナフルの境域」の西の部分に相当するのが、ホラズムである。その境域がマー・ワラー・アンナフルに接していると、ホラズムの項で、著者が再度述べているのである。

27章 シンドの地方とその諸都市についての記述

その東はミフラーン河、南は大海 (daryā-yi a'zam)、西はキルマーン、北はホラーサーンの境域に接するステップである（wa shamāl-i way biyabān ast ki ḥudūd-i Khurāsān paywasta ast） p.124

重ねていう。「接する (paywasta)」対象としての「境域」ḥudūd とは、接する具体的な外郭を持つということである。ここでも ḥudūd が外側に向かってさかいめが曖昧になっていくものではなく、「ここまではその範囲」という、広がりであることが確認できよう。

27-6 :

ティーズ：大海の岸に沿ってシンドの境域に属する最初の町である (Tiz nakhustīn shahrīst az ḥudūd-i Sind bar kirān-i daryā-yi a'zam nihāda) p.124

大きな地方の「境域」と町の関係で、町が「地方の範囲」に含まれていることが明示されている。

27-7 :

キーズ、クーシャキ・カンド、?、?、アスクフ…みなマクラーンの境域に属する町である (Kīz, Kūshak-i Qand, ?h, ??d?rk, askf hama shahr-hāy and az ḥudūd-i Makrān) p.125

これも、マクラーン地方の「範囲」に含まれる町々の名が列挙されている箇所である。

29-5 :

ジャム、クラーン、フルムク：シーラーフの境域に属する小都市で、繁栄しており、人が多い (Jam, Kurān, Hurmuk: shahrakhāyī and az ḥudūd-i Sīrāf ābādān wa bā mardum-i bisyār) p.131

シーラーフの都市圏に含まれる小都市で、ニーシャープールの「都市圏」と同様の ḥudūd の用例であろう。

29-19 :

ビシャーウル：…その境域の中には山があり、そこからはいつも煙が出ている… (Bishāwur:... andar ḥudūd-i way kūhīst ki az way dūdī hamī bar āyad) pp.133-134

「境域」の中という時の「境域」は、距離を表すか、都市からの到達範囲を表すか。いずれにせよ、一定の範囲内にあることを意味している例である。

29-29 :

ラム、ルースターイ・ルスターム、フルフ？、ターロム：ダーラーギルドとキルマーンの境域の間にある小都市である (Ram, Rustā-yi Rustām, Furkh, Tārum: shahrakhāyī and miyān-i Dārāgird u ḥudūd-i Kirmān...) p.135

都市と「境域」の間にある小都市群。つまり、これらの小都市は、キルマーンの「境域」には含まれないということになる。都市ダーラーギルド、「キルマーンの境域」とが、同じように扱われ、その間に、小都市があるという記述である。

### 30章 フーズィスターンの地方とその諸都市についての記述

その東は、パールスであり、スイパーハーンの境域である。南は海であり、イラクの境界の一部である。西はイラクの境域の一部であり、バグダード、ワースイトのサワードである。北はジバールの諸都市である (mashriq-i way Pārsast wa ḥudūd-i Sipāhān wa junūb-i way daryāst wa ba‘dī az ḥadd-i ‘Irāq wa maghrib-i way ba‘dī az ḥudūd-i ‘Irāq ast wa Sawād-i Baghdād wa Wāsīt wa shamāl-i way shahrhā-yi nāḥiyat-i Jibāl ast) p.137

フーズィスターンから見て、「イラク」との関係が、南は「境界」ḥadd、西が



「境域」*ḥudūd* となっていることに注目する必要がある。南は海で限られており、「イラク」とのさかいめは、狭い範囲である。西は接する、あるいは面する範囲が広いので *ḥudūd* が使われているのではないか。

### 31章 ジバルの地方とその諸都市についての記述

その東はパールの境域の一部、カルガスクーフの沙漠の一部、ホラーサーンの一部であり、南はフーズイスターンの境域の一部、西はイラクの境域の一部、アゼルバイジャンの境域の一部とダイラム地方の山である

(*mashriq-i way ba'dī az ḥudūd-i Pārs ast wa ba'dī az biyabān-i Kargaskūh wa ba'dī az Khurāsān wa junūb-i way ḥudūd-i Khūzistānast wa maghrib-i way ba'dī az ḥudūd-i 'Irāqast wa ba'dī az ḥudūd-i Āzharbādgān wa shamāl-i way kūh-i Daylamān ast*) pp.139-140

地方から見た沙漠、山には「境域」の語が使われない。これとは逆に、沙漠、山についての記述の章では、沙漠、山側から見た「地方」については、「何々の境域」*ḥudūd* の語はよく使われている。

32-15：

ナーティル、チャールース、ルーダーン、カラール：山地と荒蕪地の中にある小さな諸都市である。これはみなタバリスターンに属する地方である。しかし、別の支配者がいる。その支配者をウスタンダールと呼んでいる。その境界は、ライの境域から(カスピ)海まで延びている。カラールとチャールースは、本来のダイラムとタバリスターンとの間の境界上にある。このチャールースは海の岸にある。カラールは、山の中にある。ルーダーンからは、赤い色の着物が産出される。(Nātil, Chālūs, Rūdān, Kalār: shahrakhāyī and andar kūhā u shikastagīhā wa īn nāhiyati ast ham az Ṭabaristān wa lākin pādshāy-i dīgar ast wa pādshā-yi ū rā ustandār khwānand ḥadd-i way az ḥudūd-i Rayy tā daryā bi-kashad wa Kalār u Chālūs bar ḥaddīst miyān-i Daylamān-i khāṣṣa u Ṭabaristān wa īn Chālūs bar kirān-i daryāst wa Kalār andar kūhast wa az Rūdān jāma-yi surkh khīzad) p.146

境界と接する「境域」*ḥadd* と *ḥudūd* の語が意識して区別されており、しかも

両者は接している。つまり「ライの都市圏」からカスピ海まで延びる境界線が hadd である。

32-18 :

ビスターム：山のすそにある町で、グルガーンの境域に接している (Bistām: shahrist bar dāman-i kūh bi-ḥudūd-i Gurgān paywasta) p.146

「境域」と接する町の例。これも「都市圏」に町が接していて、「そこまではグルガーンの都市の影響が及ぶ、その限界にある町」ということを示しているわけである。

32-20 :

ウィーマ、シャランバ：ダマーワンド山の境域に属する二つの都市である。(Wīma, Shalanba: dū shahr ast az ḥudūd-i kūh-i Dunbāwand) p.147

「山の境域」とは、山麓のことであろう。山について ḥudūd といわれる場合は、ダマーバンドのようなコニーデ状の火山では、「ここまでが山にあたる」という「山すそ」「山麓」を意味することになる。

### 33章 イラクの地方とその諸都市についての記述

(以下のような)地方である。その東はフーズィスターンの境域の一部、ジバルの境域の一部であり、南は、イラク湾の一部と、バスラのステップの一部である。西はバスラのステップとクーファのステップである。北は、ジャズィーラの境域の一部とアゼルバイジャンの境域の一部である。これは、世界の中心に近い地方である… (原文略) p.150

地方を定義する、このような方法は、すでに見てきたように、本書独特なものである。

### 35章 アゼルバイジャンの地方と、アルメニア、アッラーンの地方とその諸都市についての記述

この地方の東は、ギーラーンの境域であり、南はイラクとジャズィーラの境域、西はルームとサリールの境域、北はサリールとハザルたちの境域である

(mashriq-i in nāhiyat ḥudūd-i Gilān ast wa junūb-i way ḥudūd-i 'Irāq ast wa Jazīra wa maghrib-i way ḥudūd-i Rūm ast wa shamāl-i way ḥudūd-i

Sarīrast wa Khazarān) p.158

「境域」にかこまれた地方という書き方は、これまた同様に、本書の「地方」定義の特徴をなす。

### 37章 アラブの地方とその諸都市についての記述

この地方のすべてを一本の川が貫流している。それは、ティハーマの山地から流れ出し、ハウラーンの境域にそい、ハド라마ウトの地方を通過して、大海に至る (wa andar hama in nāhiyat yakī rūdast ki az kūhhā-yi Tihāma birūn āyad wa bar ḥudūd-i Khawlān u nāhiyat-i Ḥaḍramawt bi-guzarad wa andar daryā-yi a'zam uftad) p.164

川が接する「境域」とあって、川が「境域」の外縁部となっていることを示している例で、これも、「境域」にはっきりとした外縁部があることを示している。

37-12:

マンカス：この場所の境域は、ハド라마ウトの境域と接している (Mankath:...ḥudūd-i in jāy bi-ḥudūd-i Ḥaḍramawt paywasta ast) p.167.

小さな町 (shahrak) の「境域」と地方「境域」とが接するとしている例である。「都市圏」と「地方圏」とでもいふべきものが、互いに外郭を接していることになる。

37-14:

アデン：海沿いにある小さな町である。そこから真珠を多く産する。アビシニアの境域に接している ('Adin: shahrakīst bar kirān-i daryā wa az way marwarīd bisyār khīzad wa bi-ḥudūd-i Ḥabasha paywasta ast) p.168

「小さな町が地方の「境域」と接している」ということは、この町がアビシニアの勢力の及ぶ、ちょうど限界にあることを示している。

### 38章 シリアの地方とその諸都市についての記述

その東はシリアのステップで、アラブの境域とジャズィーラの境域に属している。南はクルズムの海、西はエジプトの境域とルームの海の一部、北はルームの境域である (mashriq-i way bādīya-yi Shām ast az ḥudūd-i 'Arab wa

ḥudūd-i Jazīra wa junūb-i way daryā-yi Qulzumast wa maghrib-i way ḥudūd-i Miṣrast wa ba'dī az daryā-yi Rūm wa shamāl-i way ḥudūd-i Rūmast) p.170

地方の四方を定義しているのは、ステップ、「境域」、海である。「境域」ḥudūdは、それぞれの「地方」の、もっとも外側の限界を示していることになる。

### 39章 エジプトの地方とその諸都市についての記述

その東はシリアの境域の一部とエジプトの沙漠、南はヌビアの境域、西はマグリブの境域の一部とアル・ワーハートと呼ばれる沙漠の一部、北はルームの海である (mashriq-i way ba'dī ḥudūd-i Shām ast wa ba'dī biyābān-i Miṣr wa junūb-i way ḥudūd-i Nūba ast wa maghrib-i way bā'dī az ḥudūd-i maghribast wa ba'dī biyābān ast ki ānrā al-Wahāt khwānand wa shāmāl-i way daryā-yi Rūmast) pp.174-175

上の記述に類似した表現である。

#### 40-2:

マフディーヤ：ルームの海岸にある大きな都市であり、カイラワーンの境域に接して (いる) (Mahdiyya: shahrīst buzurg bar kirān-i daryā-yi Rūm nihāda ast wa bi-ḥudūd-i Qayrawān paywasta...) p178

都市が、カイラワーンの「都市圏」に接する例である。「属する」、「含まれる」という表現との違いは、前者が「都市圏」のちょうど限界に立地する (ここより先はカイラワーンの都市圏ではない) ということであろう。

#### 40-3:

バルカ：大きな都市である。それにはエジプトの境域に接している地方である (Barqa: shahrīst buzurg wa ūrā nāhiyatīst bi-ḥudūd-i Miṣr paywasta) p.178

都市とエジプトのような「大きな地方の境域」が接する例である。

### 41章 アンダルスの地方とその諸都市についての記述

その東はルームの境域、南はルームの海の湾、西は西の大洋、北はみなルームの地方である (nāhiyatīst mashriq-i way ḥudūd-i Rūmast wa junūb-i way

Khalij-i daryā-yi Rūmast wa maghrib-i way daryā-yi uqyānūs-i maghribīst wa shamāl-i way ham nāhiyat-i Rūmast) p.181

東では「ルームの境域」北では「ルームの地方」として書き分けを行っている。

41-9:

トゥルトウーシャ：ルームの海の岸に沿った繁栄した町である。それは、「ルームの海（地中海）」の岸と、どちらもルームの中にある地方のガルジスカシュ（？）とフランクの境域とに接している (Turtūsha: shahrist ābādān bar kanār-i daryā-yi Rūm wa ḥudūd-i Ghaljiskash wa Ifranja ki dū nāhiyat andar Rūm paywasta ast) p.181

この場合の「ルーム」は、「ルームの海」に添った大きな広がり、フランクも、それに含まれている。

42章 ルームの地方とその諸都市についての記述

その東はアルメニアとサリールとアラーン、南はシリアの境域の一部とルームの海の一部、アンダルスの境域の一部である。西はマグリブの大洋、北は北の無人の地の一部、サカーリバたち(サクラーブ)の境域の一部、ブルジャーの地方の一部、ハザルの海の一部である (mashriq-i way Arminiya u Sarir u Allānast wa junūb-i way ba'dī az ḥudūd-i Shām ast wa ba'dī daryā-yi Rūmast wa ba'dī ḥudūd-i Andalus ast wa maghrib-i way daryā-yi uqyānūs-i maghribīst wa shamāl-i way ba'dī wirānī shamālast wa ba'dī ḥudūd-i Saqlāb wa ba'dī nāhiyat-i Burjast wa ba'dī Khazarānast) p.181

地方名と人間集団名の混在しているのは、すでに述べたようにイスラム地理書全体にいえることであるが、本書では、そのどちらにも「境域」ḥudūdの語が使われているところに特徴がある。

49章 サリールの地方とその諸都市についての記述

その東と南はアルメニアの境域、西はルームの境域、北はアラーンの地方である (mashriq u junūb-i way ḥudūd-i Arminiya ast wa maghrib-i way ḥudūd-i Rūmast wa shamāl-i way nāhiyat-i Allānast) p.192

「境域」ḥudūd を付す場合と付さない場合のちがいはなにか。アラビア語地理書に登場する ḥudūd の多くが複数としての「諸境界」を意味することはすでに述べた。ただし、地理書に付随する地図では、地方のような広がりに対して ḥudūd の表記を行うことがある。この記述は、地図をそのまま文字化したものか。あるいは、アラーンが、特に地方として限定される特徴をもっていたのか、今の段階では不明としておく。

60-4 :

ラーバ：ヌビアの境域により近い町である (Lāba: shahrīst bi-ḥudūd-i Nūba nazdīktar) p.200

「境域」への近さとはなにか。その範囲に含まれてはいないが、その外側にあつて、近くに立地するということだろうか。

## 結 語

本稿では、*Ḥudūd al-‘Ālam* 中の「地方」にあたる記述に相当する 9 章から 60 章中の、すべての ḥudūd の語について、その用法を検討した。その結果いえることは、以下のとおりである。

本史料で用いられている ḥudūd とは：

1. 「あるものの及ぶ範囲」すなわち、「支配権」「徴税権」の及ぶ範囲、「都市圏」のような、交通、流通、人の行き来の範囲、「山すそ」「近傍」などの「地理的な範囲」など、「ここまでは、その範囲」という限度を示している
2. 都市、小都市、村などが、そこに「含まれるか否か」が問題にされるような「範囲」である
3. その外縁部は、「接する」ような実体をもつ
4. しかし、「境界」とは異なり、その上になにかが立地するものではない
5. アラビア語地理書に現れる「諸境界」ḥudūd とは、意味、用法が異なっている

6. 本史料が書かれたグーズガーナーンについての記述を中心に、ホラーサーン、マー・ワラー・アンナフルについての箇所で使用頻度が高く、そこから遠くなるに従って、頻度が低下する。このことから、けして「あいまいな」言葉ではなく、ある明確な概念をこめた用語であることが推察される

このような *ḥudūd* の用法は、*Ḥudūd al-‘Ālam* に特有なものなのか、それともペルシア語の地理書では、ほかにも同様な例があるのだろうか。

そこで、740/1340年にハムド・アッラーフ・ムスタウフィー *Ḥamd Allāh Mustawfī-yi Qazwīnī* によって書かれた『心の喜び』*Nuzhat al-Qulūb* を見てみよう。

百科全書のように、多彩な内容を持つ書であるが、その第三部 (*maqāla-yi siwwam*) が、地理学の部分に相当している。さらに、その中に20章 (*bāb*) からなる、地方記述各論の部分がある。

その17章「ホラーサーンの四つの部分（「四分の一単位」の複数：ニーシャール、ヘラート、バルフ・トハーリスターン・フッタラーン・バーミヤーン、マルヴを中心とする「地域」が、これにあたる）国々についての記述」(*dar dhikr-i ‘arbā’ mamlakat-i Khurāsān*) の冒頭部には、以下のようにある。

その中には、いくつかの都市がある。その *ḥudūd* は、クヒスターン、クームス、マーザンダラーン、ホラズムの沙漠と接している。(*darū chand shahrast ḥudūdash bā wilāyat-i Quhistān u Qūmis u Māzandarān u Mafāza-yi Khwārazm paywasta ast*) p.181

ここで用いられている *ḥudūd* は、まさにアラビア語の地理書の中で用いられている、*ḥadd* の複数としての「諸境界」である。このような用法は、他の章、たとえば、第1章「イラクのアラブ・諸国についての記述」(*dar dhikr-i ‘Irāq-i ‘Arab*)、第2章「アジャムのイラク諸地方についての記述」(*dar dhikr-i wilāyat-i ‘Irāq-i ‘Ajam*) 以降、一貫して変わらない。

このことから、*Ḥudūd al-‘Ālam* に見える *ḥudūd* が、他のペルシア語地理書と比較しても、かなり特異なものであることがわかる。

以上、本稿では、最初期のペルシア語地理書の中に、アラビア語起源ではあるが、独特な用法に発展した用語 *ḥudūd* があることを指摘した。紙数が尽きたので、これ以上論じることができないが、残された問題は多い。

たとえば、アラビア語地理書中にも、「広がり」を示すような *ḥudūd* は、多くはないが見受けられることがある。また、地理書に付けられた地図には、*ḥudūd* の文字を引き延ばして、広がり表現しているようなものもある。

*Hudūd al-‘Ālam* と、アラビア語地理書とを内容の上で比較することは、ミノルスキーらの先学が行っているが、今回指摘した文体、用語法のちがいについては、言及したものがない。これをきっかけにして、両言語の地理書をもう一度、比較し直す必要もあるだろう。

イスタフリーのアラビア語原本とペルシア語訳本との比較、*Hudūd* と *Nuzhat* とのさらに詳細な比較によって、時代による用語法の検討も行わなければならない。そののち、なぜ *Hudūd al-‘Ālam* には、かくのごとく *ḥudūd* の語が使われたかという、根本的な疑問に答えなければならない。

## 文献目録

### 史料解説

V. V. Balthold, “V. V. Balthold’s Preface” *ḤUDŪD al-‘ĀLAM ‘the Regions of the World’*, pp.3-44.

### ペルシア語地理書

Ḥamd Allāh Mustawfī-yi Qazwīnī, ed. Muḥammad Dabīr Siyāqī, *Nuzhat al-Qulūb*, Tehrān, 1336Kh./1958.

### アラビア語地理書

Ibn Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, Bibliotheca Geographorum Arabicorum, Leiden, 1889, repr., 1967.

Istakhrī, ed. M. Jābir al-‘Āl al-Haynī, *al-Masālik wa al-Mamālik*, al-Qāhira, 1961.

Ya‘qūbī, *Kitāb al-I‘lāq al-Nafisa*, B.G.A., Leiden, 1892, repr., 1967.



Ibn Ḥawqal, *Kitāb Ṣūra al-‘Ard*, Bayrūt, n.d.

Ibn al-Faqīh, *Kitāb al-Buldān*, B.G.A., Leiden, 1885, repr., 1967.

研究書・論文

Le Strange, G., *The Land of the Eastern Caliphate*, Cambridge University Press, 1930.

Minorsky, V., “Addenda to the Ḥudūd al-‘Ālam,” *B.S.O.A.S.*, 17, 1955, pp. 250-270.